
ふたりをつなぐもの

久喜由名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりをつなぐもの

【Nコード】

N8907V

【作者名】

久喜由名

【あらすじ】

十年の付き合いが終わった時、それぞれの胸にあったものは大きく違うけれど、二人を繋ぐものは消えなかった。
幼馴染から恋人へ、別れを経ても繋がる二人のお話です。

（改）が付いているお話がありますが、今のところ誤字脱字の訂正のみで、内容に変更はありません。

別れ…郁（前書き）

初投稿です。

緊張してます。

別れ…郁

「もう、いい。」

そう言い捨てて彼は振り返りもせずには部屋を出ていった。一人残され、自分の部屋なのに酷く居心地が悪い。

最近はある些細なことで喧嘩になるが、それでも別れが近いなんて思っていないかった。

今までの人生で、好きになった人は彼だけだったから。

あの『もう、いい』から早三ヶ月。

電話で仲直りはしたけど、一度も会っていないかった。こんなに会えないのは初めてのことで、どうしたらいいのか戸惑っていた。

私、うだがわいく宇田川郁は見習いコック。

彼、おたひろゆき織田紘之は国立大の三年生。

年齢は同じなのに社会人と学生だから時間が合わないことが多く、仕事の都合で待ちぼうけさせて怒らせることもよくあった。

あの日の『もう、いい』も、うちで二時間も待たせたことが原因だった。

『仕事だから仕方ないじゃない』と納得できないまま謝ったのが悪かったんだろうか。

昔からケンカすると私から謝っていた。それでうまくいっていた

から、許してくれたはずの彼が会ってくれないのが不可解だった。

……大学、忙しいのかな。

そんな風にのんびり考えていた私はお目出度い女だった。

彼にとって自分がどうでもいい存在だということを知ったのは、私が仕事で行けなかった高校の同級生との飲み会。

遅れて顔を出した彼はすでに酔っていて、皆に私との付き合いを聞かれ

『長く付き合いすぎて妹にしか思えない』と言っていたそうだ。

それを聞いていた子が心配してメールをくれていた。

仕事が終わってそれを確認した私はすぐにメールをくれた子に電話をすると、皆は二次会のカラオケに来てるけど、彼は帰ったとのことだった。

とにかく話がしたくて彼に電話をかけるが繋がらない。

不安で嫌な感じがして居ても立ってもいられず、彼の家に向かう。徒歩十分の距離が酷く遠く感じた。

マンションがある通りに出てすぐ、少し先に見覚えのある背中を見つけた。隣に綺麗な女の人。

思わず路地に引っ込み震える手で彼に電話をかけたけど、繋がったのは留守番電話。

路地から顔を出してみれば、路上で顔を寄せ合いキスをしていた。そして腕を絡めマンションに入っていく。

それが、十歳からの十年間の付き合いが終わった瞬間。

頭に血が上り「終わりなんだ」ということしか考えられなかった。薄暗い路地裏で、いつも持ち歩いているメモ用紙に

『今までありがとう。さようなら。』と書きなぐり、

そのメモ用紙で彼の部屋の合鍵を包みマンションの集合ポストに突っ込んだ。

泣きながら帰宅し、段ボールに彼の服や本、その他の私物を詰め込みコンビニから送った。

自分の行動は極端すぎじゃないか、ちゃんと顔を見て話をするべきじゃなか、そう思わなくもなかったけど、彼からは何の連絡も来なかった。

だから、きっと、これで良かった。

別れ…郁（後書き）

誤字・脱字、その他不備がありましたら、
ご指摘いただけると嬉しいです。

別れ…紘之（前書き）

男女交互視点になります。

（今回だけじゃなく、一話ごとに交互になります。）
読みづらかったらごめんなさい。

今回だけ（の予定）男性が酷いです。

別れ…絃之

散々飲んだくれて、女連れ込んで、昼に目が覚めた。
だるい体に鞭打って昼飯を買いに出かけて、帰りにポストを覗くと、

『今までありがとう。さようなら。』

そう殴り書きされたメモに包まれた合鍵がポストに入っていた。
三ヶ月会っていない彼女からの三行半だとすぐにわかり、愕然とした。

五年付き合ってきて別れを切り出されたのは初めてのことだ。

全然会ってなかった。碌に連絡もしなかった。

彼女は着飾ることに興味がなく、俺よりも仕事が優先で、何度体を重ねても慣れずに痛がる。彼女を喜ばせるにはどうしたらいいかわからず、いろんな女と出かけるうちに目的を忘れていた。彼女の仕事に嫉妬して、抱けば痛がる顔が辛く、一緒にいても苛立ち喧嘩が増えたから他の女というほうが楽だった。

寂しいことは山ほどあるのに、別れるなんて考えたこともなかったから、電話をするか家に行くか、どうしたもんか考えていたが、落ち着いてくると別れたほうがいいような気がしてきた。

最近、自分たちは合わないんじゃないかと感じていたし、これから生活環境も変わる。ただ長い付き合いの彼女がいない生活は想像できない。でも、しかし、を何度も繰り返し、昼飯も食べ損ねて頭を抱えていたら宅配便が届いた。

ダンボールに、彼女の部屋に置いていた服や本が詰め込まれてい

別れ…紘之（後書き）

すごく緊張してます。

文章、おかしいところがあったらご指摘ください。

引越し…郁

最後に彼を見た日から、何がいけなかったのか考え続けた。

彼の隣にいた女性はミニスカートに艶々の長い髪、女の私から見てもとても綺麗だった。

いつもショートカットでノーメイク、Ｔシャツにデニムばかりの私が女性に見えなくなったのかもしれない。

……浮気じゃなかったのかな。私のことを忘れるくらい、あの女の人が好きだったのかな。

父がいなくても、母と離れても、彼だけはずっと傍にいてくれると思っていたのに。

酔っていたから。キスだけかも。私から謝れば。自分から別れたくせに、未練タラタラだ。

でも、あのキスシーンが頭から離れない。頭の中が怒りでいっぱいになる。

もし縊りを戻せても、いつもいつも疑ってしまう気がした。

だから、もう忘れよう。

そう決心したのに、なかなか好きな気持ちも辛い気持ちも消えなかった。

眠れない日はお酒で誤魔化し、寝不足と二日酔いでボロボロになっ
ていった。

仕事でもミスが続き、シェフはそんな私を見かねてある提案をし
てくれた。

とある避暑地でレストランをしている長年の友人から『コックを
紹介してほしい』と頼まれているから、行ってみてはどうか。

新しい職場で心機一転するのも良い経験になるんじゃないか、と。
私は仕事の忙しさでこの辛さが紛らせることができるなら、と提

案を受け入れた。

彼が小学三年生の時にアパートの隣の部屋に引っ越してきて、離婚で母子家庭という共通点から親同士が仲良くなった。

学校では知らん顔していたけど、夜まで一人ぼっちの私たちは友達と遊んだ後はどちらかの部屋で一緒にいることが多かった。

高学年になって料理を覚え始めると、ほぼ毎日、食事の支度をまかされるようになり、晩御飯は彼も一緒に食べていた。

中学に入ると、顔が整っていて勉強ができてスポーツもそこそこの彼は人気が出て告白されることも増えていた。

その頃、彼に対する気持ちが友情ではなく恋だと気付いてしばらく嫉妬に苦しんだ。

中学三年生の修学旅行で、同級生から告白されて無理やりキスされそうになった時、助けてくれたのは彼だった。

その時、お互いに好きだということがわかって付き合い始めた。

高校も同じ所に通えたから、本当にずっと一緒だった。

私は母から、

「養うのは18歳までだから。それ以降は自立して生きていつて。」

そう言われていた。

不況で就職は難しいから手に職をつけようと考え、一番身近で、修行にお金がかからない調理師に決めた。

近所のレストランで厨房の下働きとホールの仕事をさせてもらい、それを高校三年間続け、卒業後にコックとして採用してもらえた。

母は高校卒業と同時にアパートを出て行った。

彼は高校の途中から父親の援助で立派なマンションに引っ越してしまった。

それに進学の目標が国立大だったから受験勉強が忙しかったり、進学後も毎日一緒にはいられないけど幸せな日々だった。

部屋の中は、どこもかしこも思い出だらけで、ガラクタみたいなものでも捨てるのがつらかった。

でも新しい部屋もそう広いわけじゃないし、未練はここで捨てていくって決めたから。

彼にもらった物は一つだけ。

付き合い始めて最初に貰ったプレゼントだけは一緒に連れていくことにした。

引越し…郁（後書き）

三日ぐらいで、と言いつつかけたので投稿します。
各話、文字数がバラバラですが大丈夫でしょうか…

引越し…紘之

引越しを明日に控え空っぽになった部屋を見回すと、たくさんの思い出が甦った。

「早番だから二十一時には帰れるよ」

半年前のあの日、彼女から連絡もないまま二十三時近くになり、迎えに行こうとしたところで、

「人が足りなくて抜けられなかった」と帰ってきた。

前にも何度か同じことがあり心配するから連絡は入れると言ったのに、歩いて十分の距離だからと電話をかける手間を惜しむ。

『仕事だからしょうがないでしょ』という的外れな言い訳が透けて見える謝罪に苛々が収まらず、「もう、いい」と部屋を出てしまった。

一晩経てば冷静になり電話で仲直りしたが、なんとなく会いたくなくて遊び歩いていた。

そんな時、離婚の際に父に引き取られた兄が失踪した。

父は手広く事業をしていたため後継者が必要で、兄の代わりに、と相談された。

今まで放って置いたくせに、と反発する気持ちもあったが『父に認められたい』という思いは強かった。

だから、父の申し出を受け入れた。

戸籍も家も変わる。大学に通いながら、会社のこと学ばなければならぬ。

社会人の彼女に合わせていたけど、これからはそうもいけなくなる。

だから別れるのは必然だった。

何故かわからないけど、彼女に振られたことを必死に受け入れよ

うとしていた。

十年も一緒にいたから、思い出の品はたくさんあったのに、何一つ残さずに処分した。

誕生日プレゼントのCD。

バレンタインの手編みのマフラー。

合格祝いの鞆。

マンガ、写真集、小説。

お揃いのフォトフレーム、ペアの指輪。

アルバムも捨てようとしたら、母が奪っていった。

一人ぼっちになってしまふ彼女を心配な気持ちはある。

でもしっかりものだし、きちんと生活していたから、自分なんかいなくても大丈夫だろう。

俺は適当に遊ぶほうが性に合っている。

少しの未練と、たくさんの思い出は、ここに置いて行くことにした。

引越し…紘之（後書き）

お気に入り登録、評価、どちらもありがとっございます。
とても嬉しくて張り切って書いています。

でもちよつと落ち着いたほうがいいですね。

家族が夏休みなので、次話は火曜日更新したいと思います。

レストランにて…郁（前書き）

郁視点。

八年後に飛びます。

飛びすぎですか…。

レストランにて…郁

「こつちハンバーグあがつたぞ」

レタスとトマト、ポテトサラダを盛った皿にハンバーグを乗せ、デミグラスソースをかける。

パンかライス、日替わりスープ、コーヒーか紅茶という組み合わせで八百五十円。

『restaurant pomme de terre』（レストラン ポム・ド・テール）

一番人気のハンバーグセット。

ランチタイム最後のお客さんは、常連の上川さん。いわゆるお節介が大好きな、どこにでもいるおばあちゃんだ。

おばあちゃんだけど、ハンバーグが大好きで週に三回は店に来る。この店の店主、シゲさんこと重森^{しげもり}満生^{みつお}の漬物の師匠で、漬物の他にも土地の料理を教えてくれたそうだ。

だからシゲさんは上川さんに頭が上がらない。

その師匠から三ヶ月という期間、デリバリーを依頼された。

「私とお父ちゃんて管理人してる別荘の人にね、持ってってほしいのよ」

作るの一人分。

二十八歳、男性、。

好き嫌いは特に無し。

持っていくのは夕食のみ。

定休日以外の週六日。

変更があれば、配達の際に本人から。

うちの店にテイクアウトは無い。もちろんデリバリーも。

レストランと名乗ってはいるが、素朴なログハウスの外観も相まって食堂と呼ぶほうがぴったり……。

ちなみにポム・ド・テールはフランス語でじゃがいもだ。

シゲさんの奥様の実家でじゃがいもを作ってる。いも好きの奥様が命名されたそうで、メニューもじゃがいも料理が多い。

常連さんには『いも屋』と呼ばれていたりする。

たまに誕生日パーティーや、結婚式の二次会に使われたりもするけど、こんな依頼は初めてだしイレギュラーすぎる気がしたが、シゲさんは迷わず引き受けた。

「都会の坊っちゃんに合うかわかんないけどな。師匠の頼みは断れねえ。郁とノリも協力しろよ」

「女の子だったらよかったのに。でも郁ちゃんと同い年か。アラサ
ーは女の子じゃないな」

そう言われて嫌だと言える私ではなく、ノリこと重森紀一も軽口
叩きつつも了承した。

できれば今日からでもという話なので、今日は無難にハンバーグ
とポテトサラダ、ご飯、コンソメスープにした。

六時上がりの早番が届けることになり、今週はノリが担当だ。

今日は土曜日だから明後日には私の番になる。
シゲさん、引き受けたくせにこちらに丸投げとは……。
献立、日替わりランチと一緒にダメなのか。
そっいえば予算はいくらなんだろう。
考え始めると、いろいろ出てきてしまったのでメモを取り、悩む
のは夜にすることにして仕事に戻った。

次の日。遅番の私は十時に出勤するとノリに話を聞きに行った。
話題はもちろんデリバリーのことだ。

「それがさ、全然愛想の無いやつでさ」

名前は藤倉。お酒臭く、顔色は悪く、ぶっきら棒だったそう。
次からは門の前に置いて、一度インターフォン押していけ、使っ
た容器は次の日までに門に置いておく、とのこと。

「せっかく届けてやったのに、ありがとっのーつもなくてさ。叔父
さんもなんであんなの引き受けたんだか」

なんて愚痴るノリを、ボランティアしてるんじゃないんだから、
と宥めつつ、
そんな人なら顔を合わせないほうがやりやすいんじゃないかと思
う。

でも何で夕飯だけなんだろう。

朝と昼はどうしてるんだろう。

会ったこともない人なのに、何かいろいろと気になる。ノリと今日のメニューを相談して決める。

ビーフシチュー、ジャガイモとセロリのガレット、ベビーリーフとナッツのサラダ、茸のパスタ。

肉肉魚肉肉魚。

このリズムで行って、様子を見る。話せそうならリクエストを聞く。

せっかく作るんだし、美味しく食べてもらいたい。

仕事を終えて帰宅すると、いつもはまずシャワーに入るけど今日は本棚に向かう。私の本棚は料理の本ばかりだ。

基本、初心者用、プロ用、お菓子、カレー、パン、和菓子、飲み物。

フランス、イタリア、北米、中国、東南アジア、南米、北欧。いろんなタイプの本がある。食べ物の写真を見るだけで幸せになれるから、ついつい集めてしまう。

その中からお弁当の本を何冊か手に取ってテーブルに並べた。

お店で出す料理は、お店で食べるから美味しいんだと思う。

誰といるのか、一人なのかわからないけど、ちゃんと温めているのか、お皿に移しているのか。

あの容器のまま、少し冷めた料理を一人で食べるのは虚しいんじゃないか。

毎日食べるなら、家庭料理のほうがいい。レストランのメニューはどうしても偏りが出てしまう。

だから、大人の男性の夕飯になりうるお弁当を考えるための参考に本を開いてみた。

お肉が続いてるから、明日は魚の日だ。金目鯛にしようか。
魚の次はお肉だからメンチカツ、次の日は定休日の水曜日。
木曜日は生姜焼き、金曜日は鯖味噌。
土曜日は酢豚。日曜日は鶏そぼろご飯。

お弁当として考えると、すらすらメニューが決まる。

一週間のメニューを便箋に書きとめ、月曜日に入れることにした。

誰かにお弁当を作るのは、とても久しぶりのことだった。

仕事だけど少し楽しい気分だ。

シャワーを浴びながら、毎日お弁当を作っていたころを懐かしく
思い出す。

唐揚げと卵焼きが入っていれば、他には何にもいらないと言ってい
た彼は、今どうしてるだろう……

月曜日、早番なので五時起き、六時出勤。愛車はボロボロの軽ト
ラック。

店先と店内の掃除の後、冷蔵庫をチェックしてお弁当の材料を確
保。

これから来る魚屋さんに金目を追加発注して、通常業務に戻った。

十五時からお弁当作りに取り掛かり、十八時に店を出る。ノリが
描いてくれた地図を頼りに藤倉さんの家に向かう。

いつもよりやるが増えるのは刺激がある分、少し疲れる。

そのうち慣れるかな、でもその前に三ヶ月は過ぎてしまっそうだ。

店から十五分くらいで着いた家は、白く大きなお屋敷だった。

門から家まで学校のプール一個分以上ありそうだ。
大きな門の傍に通用口があり、見慣れた食品用のコンテナが置いてある。

隣に、今持ってきたコンテナを置き、インターフォンを鳴らした。

……。

……。

しばらく待っても、応答はなかった。ドアから誰かが出てくる気配もない。

食べ物、こんな無防備に置き去りにするのは落ち着かないが、藤倉さんは顔を合わせたくないようだ。

しぶしぶ、昨日のコンテナを回収して立ち去った。

帰宅すると最初にコンテナの中を確認した。料理の入っていた容器は綺麗に洗われていた。

想像よりもきちんとした人なのかもしれない。

いつものようにシャワーを浴びてから、夕飯の支度をする。

たっぷりのレタスとタマネギ少々、ハムとチーズのサンドイッチ。
ベーコン、タマネギ、ニンジン、蕪のコンソメスープ。

サンドイッチにかぶりつきながら、藤倉さんも美味しく食べてる
といいな、そう思った

レストランにて…郁（後書き）

ぎりぎり火曜日に投稿できました。

遅くなってすみません。

お気に入り登録、評価、感想、ありがとうございます。
お気に入りが増えているとドキドキします。

サブタイトルつけるのがこんなに難しいとは…

担当変更…郁（前書き）

お待たせしました。

今回は郁視点になります。

コロコロ変わってごめんなさい。

担当変更…郁

一名様限定のデリバリーサービスを始めて一ヶ月と少し。

「これ」

十時に出勤した私に、不機嫌な態度のノリが差し出してきた一枚のメモ。

『配達していただいてる料理の件でお願いがあります。

一週間ごとに味が変わるように思います。

先週の味付けを続けていただけませんか。

よろしく願います。』

今週はノリが当番、ということは、私をご指名ってことらしい。

「これでもさ、いろいろ考えて作ってたんだけど。やっぱり年の功には勝てないか」

「年の功って……ノリとは七歳しか変わらないのに」

軽口で誤魔化してるけれど、結構悔しいみたい。

不慣れな仕事だったけれどちゃんと取り組んでいた。

でも、どんなに好きなお店の料理でも毎日食べていたら飽きると思うし、

気に入られるほうが珍しいと思う。

「郁がここに来て、もう八年だもんなあ。来た時はピチピチの二十歳だったのに……」

「来年厄年のシゲさんには言われたくありません」

「ナイスミドルに向かって失敬な」

少し硬い雰囲気になった私たちを、いつもの態度で元通りにしてくれるシゲさんは、良い上司だ。

末っ子で甘ったれ気質のノリに、一人っ子でマイペースな私という使い難い人間の扱いが本当に巧い。

柔らかくなつた空気にほっとしていたら、デリバリー終了まで一人で担当してほしいと言われた。

通常業務ならノリもできなきゃ困るけど今回は特別だし、何よりご指名だからな、と。

「味が気に入られるなんて、嫁に貰ってもらえるんじゃないか」

豪快に笑いながら背中をバンバン叩かれ、この話しは終わった。早速交代することになり、仕入れの関係もあって今日はノリのメ

ニューで行くことにした。

今日は鯖の西京焼き。ふわふわのだし巻き玉子と、ほうれん草のおひたし、里芋の煮物。

『毎度ありがとうございます。』

p o m m e d e t e r r e の 宇田川と申します。

これまでは調理師が交代で担当していましたが、今日から宇田川が担当させていただくことになりました。

藤倉様にご満足いただけるよう精進いたしますので、何かありましたらご指摘いただけると幸いです。

また、メニューのリクエストなどありましたら、御遠慮せずお申し付け下さい。』

午後の休憩時間に急いで作った今週分の献立表と一緒に手紙を入れた。

メニューを考えるのも一苦労なので、リクエストしてくれたら嬉しいのに。

まだ藤倉さんの顔も見えてないし、声すら聞いていない。会ったことも話したことも無い人に、毎日料理を作るのは結構辛い。

何が好きで、何が嫌いなのか。朝、昼はどんな食事をしているのか。気になるけど、知りようがない。

毎回綺麗に洗われている容器が恨めしいような気持ちになる。

私の味も、そのうち嫌になられたらどうしよう……。『

そんな不安を抱えながら配達に向かった。』

次の日。

回収したコンテナの中にメモが入っていた。

『お気遣いありがとうございます。毎日、今日のメニューは何かと楽しみにしています。

いつでもいいので、鳥の唐揚げ、甘い卵焼き、ポテトサラダをお願いします』

藤倉さんがくれた初めてのリクエストは、私にとっても懐かしいメニューだった。

昔は何度も作ったけど、今は全然作らなくなってしまったメニュー！。

何となくだけど、仕事を始める前に作っていた味で作ってみたくなった。

そして、次の日に早速そのメニューを持って行くと、

『とても懐かしい味でした』

翌日、そう書かれたメモが入っていた。

それから、月曜日に持つて行く献立表に少しの言葉を足すようになり、

藤倉さんからも返事が来るようになった。

料理のリクエストだったり、この土地の話だったりした。

短い文章のやり取りが、とても楽しくて私は少し浮かれていた。

藤倉さんは大きな別荘に住んでいるのに、案外庶民派のようで。

だから私の作る料理も口に合うのかもしれない。

私が一人で担当し始めて二週間が過ぎる頃には、

鳥の唐揚げ一週間に一度の定番メニューになっていた。

お祝いの日でも、そうじゃなくても、何が食べたいか聞くと必ず『唐揚げ』としか言わなかった絃之。

ここに来て八年。

ここに来る切欠になったのは絃之との別れだった。

辛かったし、たくさん泣いたし、忘れたいとも思っただけど、忘れられなかった。

今はちゃんと眠って、しっかり働いてるけど、誰にも心が動くことはなかった。

それなのに、顔も見たことのない藤倉さんが気になってしょうがなかった。

担当変更…郁（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

時間がかかってしまって申し訳ないです。

三日に一度と言いつつ、一週間に一度になりそうです……

失敗：紘之（前書き）

紘之視点。

『引越し』から八年後です。

場面転換が多いので、わかり辛かったらごめんなさい。

失敗：紘之

通話の切れた携帯を握り締めたまま突っ立っていた。

どれくらいそうしていたかもわからないくらい、我を失っていた。この一年、必死に取り組んだ仕事が無に帰した。

自分を認めさせる為にも、絶対に成功させなければならなかったのに。

兄の代わりに会社に入って六年。ずっと比べられてきた。

結果を出しても評価してもらえないのに失敗など許されるわけがない。

今回のプロジェクトは、内部の人間によって潰された。

父は、失態を重ねた自分を見限るだろうか。最近行方のわかった兄を呼び戻すかもしれない。

これからのことを考えると頭が痛かった。

今回の件で企業スパイだった人間を処分できたが、良いことといったらそれくらいのものだった。

この一年は不眠に悩み、酒に頼る日々が続いていて、体調があまりよくなかった。

疲れきって帰宅すると、父と兄が和やかに食事をしている。

「仕事、頑張ってるんだってな。」

穏やかに話しかける兄の笑顔が、こんな日に兄と食事してる父が、無性に腹立たしかった。

「お前のせいで……」

そんな言葉が口を突いて出た。

「俺がどれだけ苦勞したかわかるか。わかるならここにいるはずないか」

憐れむように顔をしかめた兄の胸ぐらに掴みかかったが、殴ろうと振り上げた手は父に押さえられた。

父の手を振り払い自室に戻ると、瓶のまま酒を一気に流し込む。気付いた時には瓶は空になっていて、

どれだけ飲んだか自覚した途端、酷い目眩に襲われベッドに倒れ込むと意識を失った。

目が覚めると病院だった。

嘔吐して意識の無い自分を、部屋を見に来た父が発見し救急車で運ばれたそうだ。

『仕事のことは考えなくていい。空気の良い所に別荘があるから、ゆっくり体を休めてこい』

休みなんかいらない、そう言い張ったが通らなかった。

病院のベッドの上で、無力感に苛まれた。

兄にしたことは完全に八つ当たりで、自分の馬鹿さ加減に心底うんざりした。

他の誰よりも、自分自身が兄と比べていたのだ。

兄のお陰で巡ってきたチャンスを生かせなかった。

父に期待されて嬉しかった。完全に舞い上がっていた。

育ててくれた母を捨て、ずっと傍にいた幼馴染を捨て、何も残っていないことに今気付いた。

父の元から、兄と同じように逃げたとして、また同じように穏やかに食事ができるとは思えない。

父の元に行くことに反対していた母の元にも、もう戻れるとは思えない。

全ては己が招いたことだが、どうしようもなく独りだということに嘔みしめていた。

何もかも父の手配で事は運び、一週間の入院後、山に追いやられた。

でかい二階建ての屋敷に一人きり。訪ねてくるのは通いの家政婦と、別荘の管理人夫妻。

皆、年寄りだからか、田舎の人だからか、世話を焼くのが好きなのうだが鬱陶しかった。

何もする気が起きず、飯も喰わずだらだと酒を飲んですごしている、管理人の妻のほうからある提案をされた。

「うまい夕飯を食べれば、うまい酒が飲めるし、よく眠れるだろ」

近所のレストランから、デリバリーしてもらおうという。

普段はデリバリーはしてないらしいが、話をつけてくれたそうだし自分にはどうでもいいことだったから丸投げしていたし期待もしていなかったが、

これが自分を見つめ直す機会になるとは思ってもみなかった。

とりあえず三ヶ月、と決められた療養期間が始まった。

失敗：紘之（後書き）

お気に入り登録が百件超えてました。

驚きです。ビックリです。

ありがとうございます。

更新遅くなってしまって、すみませんでした。

引きこもり…紘之（前書き）

引き続き紘之視点です。
更新遅くなつてごめんなさい。

引きこもり…紘之

この別荘に来て二週間が経った。

週に一度かかってくる父からの電話。

月曜日と木曜日に来る通いの家政婦、三谷^{みつや}さん。

ほぼ毎日昼過ぎに来る上川の婆さん。

何もする気が起こらず、時間に関係なく酒を飲み、だらだら過ごす。

飯は食ったり食わなかったりで、三谷さんに買ってきてもらったもので済ましていた。

父から『とりあえず三ヶ月休め、仕事の話はそれからだ』と言われ、それも無気力の要因になっていた。

療養で来ているはずなのに、気持ち塞ぐばかりだ。

余りにもだらしない生活に上川の婆さんがあきれ果て、夕飯の手配をするという。

何度も断わると父に連絡され、電話で叱られるという情けないことになり仕方なく受け入れたが、届いた食事はなかなかの物だった。

届けに来たのは若い男で、お世辞にも愛想がいいとは言えなかった。

毎日会いたいと思えるわけもなく、次から置いていくように伝える。

上川の婆さんの行きつけの店だそうだが、どんな店なのか少し気になるが出かけて行く気にはならなかった。

あいかわらずの引きこもり生活を過ごす中で、夕食が楽しみにな
っていた。

一週間ごとに担当が代わるのか、メニューや味付けが全く違った
ものになる。

いかにもレストランというものと、一般家庭の飯、飯というか弁
当のようなもの。

どちらも美味いが、食べてほっとするのは後者だった。

朝は食わず、昼は三谷さんが買ってきてくれたパン、冷凍食品、
カップラーメン。

上川さんに『家政婦に食事も作らせればいい』と言われたが、長
時間、家の中にいられるのが嫌だったから断った。

唯一のまともな食事だからこそ、我侭な提案を申し出てみた。
弁当みたいなほうだけにしてくれ、と。

断られるかと思いつながらした提案は受け入れられ、望みの食事が
食べられることになった。

担当者の宇田川さんは、さっそく手紙をくれリクエストも受けて
くれるらしい。

早速、鶏の唐揚げ、甘い卵焼き、ポテトサラダをリクエストしてみ
た。

弁当。

宇田川。

ずっと忘れていた思い出が蘇る。

別れて八年経つ元彼女が作ってくれた弁当。

祝い事の時は、必ず鶏の唐揚げが出た。

料理の苦手な母より、俺の中の母の味といったら郁の料理だった。

今頃どうしてるんだろう。

自分勝手に振舞って振られてしまった。別れを切り出された時、追いかけてもせず……。

散々浮気して、女と付き合うなんて簡単だと思っていたのに、郁と別れた後は誰とも長く付き合うことはなかった。

仕事にのめりこんでいたここ数年は、付き合うことすらなかった。こんなところで燻っている俺を見たら、郁はどう思うだろう。

いつでもいいと書いたのに、リクエストの翌日に届いた夕食は懐かしさでいっぱいだった。

その日は子供の頃のことや、郁のことを思い出しながら、久しぶりに酒に頼ることなく安眠できた。

次の週明け、一週間の献立表に今までなかった私信が付いていた。うちからも徒歩でも行けるくらいの距離にあるカフェの情報だった。パンやサラダ、飲み物もテイクアウトできるらしい。

なんとなく、本当になんとかだが、ここに来て初めて出かける気になり教えてもらった次の日に店に行ってみた。本当に良い雰囲気のお店だった。

店の感想と、料理のリクエストを書いた手紙の返事にも、美味しい蕎麦屋や惣菜屋の情報が書いてあった。

宇田川さんの教えてくれた店には、三谷さんに頼まず自分で出かけるようにした。

彼女の教えてくれる店にはハズレが無く、また来ようと思える所ばかり。

店だけじゃなく、勧めてくれたものも当たりが多く、友人になれるんじゃないかと思ってしまう。

教えてもらうことばかりだったが、宇田川さんとのやり取りは心地よいものだった。

外に出る機会が増えるにつれ酒の量も減り、食事を摂るようになったせいか体調も良くなり、ずっと目を背けていた自分自身の問題とも、少しずつ向き合い始めた。

宇田川さんが、手紙に書いてあったことから女性だと知ってはいた。

一度、配達時間に窓から覗いてみたが帽子をかぶっていたし、薄暗くてよく見えず……。

服装はＴシャツにデニム。年齢はどれくらいだろう。

手紙では二十代か三十代、落ち着いた大人の女性、という印象だった。

人と接する機会が少ないせいで人恋しくなっているんだろうか。彼女が気になってしかたない。

上川さんに頼んで店に連れて行ってもらおうかと思っていた矢先、読書に夢中になりソファで転寝した夜、急激な冷え込みで風邪をひいた。

熱が出て、咳がとまらない。頭痛も酷い。だるくて動けず寝込んでいると、独りきりということが沁みてくる。

薬の場所もわからないから眠ることに専念していると、昼過ぎに訪れた上川の婆さんに発見され病院に連れていかれた。

患者は少ないようで、すぐに診てもらえた。
たんなる風邪だから、暖かくして、きちんと食事を摂り、薬を飲むこと。

すぐに診療は終わり会計を待っていた。

ベンチに腰掛け目を閉じて俯いていると、隣に座っていた上川の婆さんが誰かと話し始めた。

「ノリ、どうしたの」

「大したことないんですけど、ちょっと火傷しちゃって」

「そりゃ大変だね。郁ちゃんは付き添いかい」

「この手じゃ運転できないですからね。上川さんはどうされたんですか」

「郁ちゃんと同じ付き添いでね、この人の」

「あ……、藤倉さん」

郁ちゃん、上川の婆さんはそう言った。

反射的に目を開いて顔を上げると、婆さんの前に二人の男女が立っていた。

男に名前を呼ばれたが、目が女に吸い寄せられて離れない。

Tシャツにデニム、きつちりポニーテールに結った長い髪、俺を見て驚きに見開かれた瞳。

自分も驚きすぎて声も出せず、八年で女はここまで変わるものな

のか、そんなことを考えていた。

引きこもり…紘之（後書き）

お気に入り登録、評価、どちらもありがとうございます。

ご飯であっさり立ち直りすぎかと。 あっさり再会させすぎかと。
ちよっと悩んでしまいました……。

驚愕：郁（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。
ごめんなさい。
今回は郁視点に戻ります。

驚愕：郁

『とても良い雰囲気のお店ですね。』

『宇田川さんのお勧め、良かったです。』

『次に行く時には、天気が良ければテイクアウトして公園で食べたいですね』

藤倉さんからの返事は、いつも楽しげだった。

文通……と言っているのだろうか。このやり取りを何て呼べばいいんだろう。

そんな風に悩む瞬間もあったけど、続けることを躊躇う気持ちはなかった。

私がお店や料理を教えるかわりに、彼は映画や本を薦めてくれた。そのお勧めの中に私も大好きな小説があり、しばらくの間、その話一色になったりもした。

彼のリクエストに答えつつ、健康にも気をつけたメニューを考え、朝や昼のアドバイスもした。

『情けない理由でここに来て、酒飲んで時間をやり過すつもりだったけど、

宇田川さんのご飯でいろんなこと思い出しました。

子供の頃の懐かしい味のお陰で、少し前向きになれました。毎日ありがとうございます。』

唐突にそんな返事が来たときは、かなり驚いた。
そんな風に思ってくれて嬉しかったし、それを打ち明けてくれた
ことも嬉しかった。

味覚や趣味が似ていて、親近感を強く感じるようになっていた。
会って話がしたい。顔を見てみたい。

でも藤倉さんにとつたら、私なんて、ただのご飯担当でしかない。
しかも三ヶ月の間だけだ。

あと一ヶ月とちょっとしたら、この繋がりは切れてしまう。
それを考えると、とても切ない気持ちになった。

急に冷え込んだ次の日。

お昼にやってきた上川さんは、いつものハンバーグセットを完食
すると、この後藤倉さんの所に行くと言う。

来た頃に比べると、随分健康的になってきたそうだ。

訪ねて来る人がいないそうで、自分が行ってあげないと、と笑っ
ていた。

そろそろランチタイムの混雑も落ち着いてきた頃、私はオムライ
スを、ノリはポークソテーを作っていた。並んでフライパンを振っ
ていると、

「兄さん……」

カウンターで知り合いと話していたシゲさんが唸るように言った。

隣のノリが反射的に振り返り、フライパンをガス台に置いたままカウンターに近寄る。

「何しに来たんだ」

いつものノリとは違う低い声。

私の位置からではカウンターの向こう側が見えず、何が起こっているのかわからない。

シゲさんのお兄さんは、ノリのお父さんだ。

大学受験の失敗と、将来の進路で揉めていたと聞いたことがある。仲直りに来たのだろうか。

「もういい加減、気が済んだだろう。そろそろ戻ってきたらどうだ。こんな所にいたってしょうがないだろう」

カウンターの向こうの人は落ち着いた声で話しかけた。

でもその問いかけにノリは答えず、こちらに戻ってきた。

オムライスを完成させた私はポークソテーの面倒をみていたけど、戻ってきたノリにその場を譲り、出来たものを運ぼうとした瞬間、

「あっ」

叫び声と、フライパンがガス台に当たる音。振り返ればノリが床に蹲っていた。

素手でフライパンの柄を掴んで、手のひらを火傷したようだ。肩を叩いて水で冷やすように言い、無事だったポークソテーを盛り付け、オムライスと共にシゲさんに任せノリの手を見に行く。大丈夫かと声をかければ、無言で頷く。でも掌は悲惨なことになっていた。

シゲさんにも見てもらい病院で見てもらったほうがいいだろう、ということ私の運転で送ることにした。

車の中でノリは頂垂れていた。

「みつともないとこ見られた……くそっ」

父親にドジを見られて落ち込んでいるらしい。病院に着くまでぶつぶつ文句を言い続けていた。

両親との繋がりが薄い私からしてみれば、どんな事情があろうとも、忘れずに会いに来てくれるのは羨ましい。

私と母なんか、十年会っていない。引っ越す時に連絡を取り合う程度だ。

だから少しいじけた気分になっていた。

父も、母も、紘之も。

みんないなくなってしまった。

自分が大切だった人達にとって、自分が価値のない人間だったと思うのはとても辛いことだ。

一人ぼっちだと思いたくないけど、現実には孤独だった。

困ったら手を貸してくれる人はいるけど、心を預けられる人は長

い間いまま。

だから、親や肉親に守られているのに、小さなプライドが傷ついたり憤ってるノリに、早く気付いて欲しいと思う。

理解されなくて怒ったり、悲しんだりできるのは繋がっているからなんだと。

病院に入ると待合室は空いていた。

受付の手前のベンチに、上川さんが座っていた。背の高い男性が隣に座っているが、俯いていて顔が見えない。

上川さんは、手に氷嚢を押し合ってたノリに声をかけ、隣を指差しながら自分も付き添いだと言う。

その男性が顔を上げると、私の目は彼に釘付けになった。

「あ……、藤倉さん」

ノリがぼそつと言ったが、頭が理解することを拒んでいるみたいだ。

八年会っていなかったけど、すぐにわかった。

織田紘之。

ボロボロになるくらい、別れが辛かった、大好きだった人。彼が藤倉さんだなんて……。

驚愕：郁（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
更新が無いのに増えていて感激です。

大体の筋書きは決めていたのに、とても迷ってしまいました。
結末は迷ってないんですが…。

再会（前書き）

前回更新より一ヶ月以上かかってしまいました。
ごめんなさい。

再会

頭の中が真っ白になった。

目の前の人と、『藤倉』という名前が結びつかない。何も言えずにいる私を、彼はじっと見つめている。

どれくらい見つめ合っていたのか。

肩を叩かれ振り向くと、ノリが診察室に入ると言ってきた。その時、彼も会計から呼ばれ席を立った。

その姿を目で追いながら立ち尽くしていたが、声をかけられて我に返った。

「藤倉さんとはお知り合いだったのかい」

返答に困っている内に上川さんが立ち上がる。

「ノリ、酷くないといいね。じゃあ、私たちは失礼するよ」

私の肩をぼんぼんと叩いた上川さんに頭を下げ、二人が出入り口に向かうのを眺めつつベンチに腰掛けると、

彼が自動ドアの手前で踵を返し戻ってきた。

「今日の配達の後、少し話せないか」

緊張した面持ちと掠れた声で問われ、思わず頷いていた。
じゃあ後で、と言って去って行く背中を見送り、ノリの治療が終わるまでぼんやりしていた。

ノリの火傷は十日くらいで治る見込みとのことだった。ただ水疱なんかもできているらしく、しばらくは左手は使えないらしい。物をつかめない、水に濡らしちゃいけない、ということは利き手ではなくても仕事にならないということだ。

ノリが治るまで彼と話す時間は作れないかもしれない。その予想を、とても残念に感じていた。

シゲさんに電話報告してから急いで店に戻ると、ノリの父親は帰ってしまった。あ

あの状態じゃ冷静に話せなかったかもしれないが、あつさりした態度に驚いてしまう。

そして、ノリの代打にシゲさんの奥様『景子さん』が来てくれた。いた。

景子さんは開店当時厨房に立っていたので、心強い助っ人になってくれる。

四歳と二歳のお子さんをお姑さんに預けることになるので、景子さんが早番、私が遅番になった。

藤倉さんのデリバリーに関しては、私が作り、景子さんが届けることに決めた。

ノリはとりあえず一週間休み、後は火傷の治り具合をみて決めることになった。

早速今日から遅番なので、夜の分の仕込みをしながら藤倉さんの分を作る。

まだ、私の中の藤倉さんと彼は結びつかない。でも昔を思い出すと、風邪をひいてもいつもご飯はしっかり食べていた。

蕪のスープ、茹で豚に生姜と長ネギのタレをかけたもの、キャベツのおひたし、柔らかめのご飯。

それと保存用の瓶に、蜂蜜と生姜のスライスを入れたもの。子供の頃から風邪の時には、これをお湯で割って飲んでいた。覚えてるかな。

『今日、行けなくなってしまいました。ごめんなさい。

スタッフの一人が怪我をして、最低一週間は時間が取れません。

調理担当は私が担当しますが、配達は別のスタッフが担当します。

また仕事が落ち着き次第、連絡いたします。

『ご自愛ください』

手紙を書きながら、ごく当たり前のように彼に会おうとしていることを疑問に思った。

思い返せば、最低の別れ方だった。ちゃんと話そうとしなかった自分も悪いが、彼も別れ話さえしに来てくれなかった。

この土地に来る原因だったのに、ここで再会するなんて……。

ノリの父親が尋ねてきたことも、少し関係あるのかもしれない。

私には誰もいないんだな、と考えてしまったから。

彼とずっと一緒だったから他に友達を作ろうともせず、母と離れる時でさえ孤独感に苛まれることもなかった。

『友達でいいから』

『ただの幼馴染でいいから』

何度そう思ったことか。でも無理なのは自分が一番よくわかっていた。

彼が他の女性と一緒にいることに耐えられるわけなかったから。

苗字が変わってること。

荒んだ生活をしてたこと。

気になることはあるけど『話そう』と言われたことが、とても嬉しかった。

今の彼に彼女はいない。辛さを分け合う友人もいない。

それを文通もどきでわかっていたから、気兼ねなく話せると思ったのだ。

交わしたやり取りで懐かしいことを思い出すのも当然のこと。

藤倉さんが気になっていたのは、結局『彼』だったから。

それに行き着いたとき、少し苦しくなった。

彼との別れが辛かったから、なかなか誰も好きになれないんだと。だけど彼にしか気持ち動かないのだとしたら。

……元彼相手に、何考えてるんだろう。

あまりにも突然のことで、冷静さを失ってるんだ。彼も寂しい生活で人恋しいだけなんだ、きっと。あと一ヶ月で、ここからいなくなる人なんだから。

『蜂蜜生姜、ありがとう。これも懐かしい味です。
風邪も治ってきました。』

今日は本当に驚きました。

宇田川、という名前を見た時に頭に浮かんだのは郁だったけど、まさか本当に郁だったなんて、すごい偶然です。
届く料理に懐かしさを感じるなんて、郁の味を覚えてたんだな。

もう二度と会えないと思ってたけど、再会できて嬉しいよ。
せっかくだから少し話したいです。

時間が作れる日を待っています。 紘之『

別れた時のことを考えれば素直に喜んでいいのか疑問だけど、私も少し浮き足立ってる。

でも素直に嬉しいなんて態度は見せたくなくて、手紙の文章はすこし畏まって書いてしまった。

風邪は治ったか、仕事の調子はどうか、お互いにそれを繰り返して聞くうちに一週間が過ぎた。

再会（後書き）

次回はもっと早く書けるように努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907v/>

ふたりをつなぐもの

2011年11月26日21時45分発行